

のと思われる。

施文方法は原則として沈線であるが、沈線間を櫛歯状工具による条線で埋めるもの（3・25・53・55）や、縄文を充填するもの（1・8・10・30・43・50）などがある。一般に沈線の幅は広く、先端が丸みを帯びた工具が使われている。しかし、中には極端に幅の狭いものが用いられているもの（6・22など）もある。

編年の位置づけとしては、葛西勲氏の言う十腰内 式第3段階、十腰内 式（新）（葛西1979、2002）、成田滋彦氏の言う十腰内 B式（成田1989）に相当するものであろう。児玉氏の編年観に当てはめれば、本資料は3本沈線手法も見られるものの、櫛歯状工具や縄文による文様帯間の充填手法から、5期（児玉2003）に当たるものと思われる。この型式の土器は各氏とも大きな違いはなく、概ね共通したとらえ方である。以上から、本資料も十腰内 式の新しい段階に相当し、昭和年代に行われた本遺跡の資料とも同時期のものと判断される。（小笠原）

剥片石器...103点出土した。定形石器は図化した5点（図50-1~5）のみで、剥片・碎片が98点と9割を占める。大石平型石筥が2点（1・2）あり、2は1に比べ、基部形状が不明瞭で、やや雑な作りである。3は背面片縁の一部に調整が施され、もう一方の側縁には連続した微小剥離痕が背面と腹面に認められる。4は石槍の未製品である。5は自然面のある剥片を素材とし、やや厚手の側縁側に調整を施して、やや角度のある刃部を作出している。

剥片類を重量で区分すると、1.0~4.9gが44点と最も多く、5.0~9.9gが24点、1.0g未満が15点、10~26.3gが15点と続く。石材は、玉髄質珪質頁岩4点を除き、全て珪質頁岩である。石材の様相から、珪質頁岩を3つに大別したが、接合したものはなかった。捨て場周辺のグリッドからも多量の剥片・碎片が出土しているが、石核が出土していないことから、石器製作後に使用しない剥片類を廃棄した場所とも考えられる。

礫石器...3点出土した。6の凹み石は凝灰岩の石皿の破片を転用したものである。断面形は掘り鉢状となり、表面の凹み痕は非常に明瞭である。他は、角閃岩の磨製石斧の破片、両面に磨り面のある凝灰岩の破片である。（杉野森）

#### 人物線刻石冠について

石冠は、上記の捨て場から出土した。捨て場は確認段階から多数の石器や土器片等が出土し、その中に石冠も含まれていたことは認識したが、これまで遺物の水洗は行っておらず、線刻は確認していなかった。遺物の洗浄作業を行っていたところ、石冠に人物が線刻されていることが判明した。

石冠の平面形は横にやや長い長方形で、頂辺が斧の刃部状を呈し、断面形は三角形状である。幅7.4cm、高さ6.1cm、底部の厚さ4.1cmである。頂部の両面と底面に明瞭な磨痕がある。線刻は正面のみで、裏面及び側面には敲打痕が観察される。石質は砂岩である。

施される線刻は幅1mm~1.5mmほどである。人物は3体で、いずれも同様の手法で描かれている。頭部は小さな円形の窪みで表現され、その下には肩を表した横の直線、更にその両端を直角に曲げ、腕を表現している。先端には手を表した短い線が刻まれる。頭部下には直線で体部、その下に広げた脚部が刻まれている。脚部先端にも指を表した短線がある。3体のうち2体は上下に横たわった状態

に並んで、もう1体は2体の頭部の位置に倒立状態で描かれている。

各人物の大きさは、横向きの2体のうち下が38mm、上が33mm、逆向きの1体が28mmである。横向きの2体は、下の1体の足指表現が極端に誇張されるため、差異が大きくなっている。胴部は下が17mm、上が14mm、逆向きが12mmである。広げた両足の幅は横向きの2体が10mm、逆向きが8mmである。肩幅なども加味して判断すると横向きの2体はほぼ同じ大きさで、逆向きの1体は小さく描かれていることがわかる。

細部では、表現方法に違いが見られる。横向きの2体のうち、下の1体は手の指が5本、上の1体の手の指は3本で表現される。肩の表現でも下の人物は水平に、上の人物は怒り肩状に上がる。足の指も手と同様の表現であるが、下のものは足指の先端が吸盤状に丸く作り出される。

これら3体は、精霊や神などの信仰的な対象を表現した可能性も否定できないが、根本的なモチーフの遡源は人物にあったことは間違いないであろう。横向きの2体の表現方法の違いは意識的なものであり、異なる2種類の人物を表したものと考えられる。機能や役割を異にする2種の人物、例えば男女の違いであるとか、実生活での一場面や信仰上の儀礼的職能分担の表現など様々に考えられる。石冠の用途については不明な点が多いが（中島1995、能登1983）、男女の性表現を表したものだとなれば（春成1996）、性差を表した遺物であるように思える。また、明らかに小さく描かれている1体の存在から、男女（大人）と子供の家族である可能性を、ひとまず考えておきたい。家族を直接的に表している可能性もあるが、むしろ、授産や安産などを儀礼的・観念的にイメージ化したと考えておきたい。類する遺物である三角形土製品に人物と見られる文様の存在（草間・金子ほか1971、小島1995）や、手が描かれた石冠の存在（小林編 1988、春成前掲）など、何らかの関連が伺える資料がある。石冠の用途を示す手がかりとなるものかもしれない。

いずれにしても、本資料は絵画資料の少ない縄文時代にあって、帰属時期や人物という主題が明確で、しかも3体が1個の遺物に描かれているという、非常に希有で貴重な資料である。（小笠原）